48年前の大惨事

～忘れてはならない昭和37年7・8大水害～

【災害の概要】
大浦でこんなことが起こったのです

昭和三十七年七月八日、太良町はそれまで見たこともない集中豪雨にみまわれました。一昼夜の雨量が八百ミリをこえました。まさに、バケツをひっくり返したような大雨でした。町内の河川は大氾濫を起こし、いたるところで山はくずれ、田畑は流され、家はめちゃめちゃにこわれました。荒れ狂った山津波は、一瞬にして、四十四名の大切ないのちをうばいさり、百二十七名の重傷者を出しました。

交通通信網は至るところで寸断され、医療品や食料は、ほとんど泥水に押し流され、見るも無惨な状況でした。町は直ちに救助活動にとりかかりましたが、あまりの大惨事のため、困難を極めました。

【災害復興】
悲しみを乗り越えて
～みんなの力の結集～

この大災害のため、町内の消防団をはじめ、婦人会、青年団、育友会は総動員で救助、援助活動に全力を出し合いました。自衛隊も出動して死体の発掘、鉄道、小学校の校庭、運動場などの泥を取り除く作業に懸命の努力を続けました。けがをした人びとたちの手当は、町内の医師はもちろん、藤津、鹿島地区の医師会からも応援を得て、協力してあたりました。家を失った人たちは、大浦中学校の体育館を避難所として、約一ケ月を過ごすことになりました。その後、プレハブの仮設住宅が造られ、そこにうつりました。

この間に、赤十字社、県内各市町村、各学校の児童生徒から寄せられた救援物資、見舞金等は莫大なものであって、被災者の立ち上がりに大きな役割をはたしました。

その後、町当局の国や県に対する折衝努力によって、災害激甚地に指定され、町民が一丸となって災害復旧に邁進しました。

語りつがれる7・8の日
大浦小学校で行われている『7・8災祈念集会』

大浦小学校では、毎年、七月八日に「七・八災害祈念集会」が開かれています。今年も、亀の浦在住の大江辰則さんをお招きし、災害当時のお話をしていただきました。前半は写真を使っての説明を、後半は次のようなお話をしていただきました。

昭和三十七年の七月は、一日より五日まで雨が降り続き、亀の浦の川が増水して溢れようとしていたので心配していた。六日に雨がやんだので川の水が引き、ほっとした。しかし、ほっとしたのもつかの間、七日よりバケツをひっくり返したような、雨粒の大きいどしゃぶりになり、川はみるみるうちに増水した。川の水は溢れ、国道も水浸しになり、川のような状態になったので、二階に避難したが、祖父は一階の仏壇から離れようとしなかった。川の水がさらに増え、溢れた。二階から祖父を呼びに階段を下りたら、階段が浮き始め慌てて二階に戻った。

権現山の様子を見た人の話によると、山の頂上付近から水が噴き出していたということであった。時間的なことを考えると、その後、権現山が崩れたと思われる。土砂は家や畑などを押し流し、線路まで流れ出て、大きな被害が出た。中嶋医院付近は、水かさが増し、当時、どこの家でも飼っていた豚が流されていくのが見えた。水は自宅の二階まで達し、死ぬのを覚悟した。

その後、消防団の人が屋根に穴を開けて救助に来てくれたので、屋根に上がって助かった。ただ、まわりは濁流のようになったので、怖くて屋根にしがみついた。その後、隣の家にはしごが渡されたので、そのはしごを伝って避難した。さらに、中嶋医院の方へ避難した。祖父は亡くなった。権現山が崩れ、その土砂で亡くなった方もいるが、祖父のように溢れた水で亡くなった人もいる。

亀の浦ばかりでなく、里や広谷でも大きな被害が出た。

話を聞いた子どもたちの感想

★今日の朝、体育館で七・八災害の話がありました。今年は、当時中学3年生だった中嶋医院の前に住んでいる大江さんが話してくださいました。写真もあったので、見ながら説明をしてくださったのでよくわかりました。こんなことがないようにこれからも気をつけたいです。

★今日、朝、亀の浦の方から、七月八日におきた災害の話をうかがった。ぼくは、話を聞いていて、被害にあった人がかわいそうと思った。しかも四十四人も亡くなっているなんて…、と思った。こうならないように願いたいです。

★今日、大江さんと言う方が七・八災害の話をして下さいました。大江さんから、その災害で四十四人の人たちが亡くなったという話をしてもらいました。私は大江さんが生き残れてよかったなと思いました。

編集後記

今年初めて広報部に携わって全員が力を合わせて「ひこばえ」を作っていることを知りました。各行事に始まり、地域の情報を調べ、お年寄りから子供達にわかりやすく読んでもらえるよう「地域密着型」で頑張っています。これからも楽しく「ひこばえ」を読んでいただけるようお願いいたします。

広報部　山田孝英